



水と大地が織りなす豊かさを 享受する阿賀野川下流域の 持続可能な今後とは？

参加者56名
(オンライン含む)

座学講座

11/2 (日)
13:30~16:00
ハイブリッド
形式で開催

開催レポートをお届け
します!



阿賀野川下流域の水と大地が織りなす 豊かさを考える講座&バスツアーを開催

下流域における風土の形成と
人間との関わりを考える

令和7年度の講座では、阿賀野川下流域における大地の形成について学びました。その後、下流域の特徴的な地形を巡り、その風土に適応してきた人々の営みをたどることで、過去の「光と影」を振り返る講座&バスツアーを開催しました。

11月2日の座学講座は、対面とオンラインを併用したハイブリッド形式で開催し、56名の方々にご参加いただきました。当日は、新潟国際情報大学の教授で、地形学が専門の澤口晋一さんを講師に迎え、主に阿賀野川下流域における大地の形成について、豊富なスライドを用いて解説していただきました。

▲メイン講師は、新潟国際情報大学国際学部国際文化学科教授の澤口晋一さん。現地バスツアー #2のガイドも担当していただきました。

11/2
参加された皆さんの
「ご意見・ご感想」

●澤口先生のお話がとてもおもしろく、興味深い内容で感激した(阿賀野市・40代)／●澤口先生は専門的な内容をとても分かりやすく話され、楽しかった!(新潟市江南区・60代)／●新潟平野の地形や断層にとっても興味を持つことができた。バリアー(沿岸洲)やラグーン(潟湖)など、もっと知りたくなった(新潟市東区・70代)／●笹神丘陵の河川の屈曲と月岡断層の関係に納得!(阿賀野市・70代)／●身近な地域の景観について、自然環境による影響が関わっていることが分かった。今後地域を巡る時にもこうした知識を持って注意深く見たいと思った(新潟市東区・60代)／●FM事業のイベントに参加する度、新しい発見がある(新潟市北区・80代)／●FM事業は新潟水俣病の問題から目をそらさず、且つ地域の特性や魅力を発信し続けている。これからも応援したい(弥彦村・50代)



新潟平野に浜堤や砂丘列が形成されていく様子

砂丘など 潟湖・沼沢 湿原・泥炭地 デルタ・氾濫原 山地・丘陵 扇状地

阿賀野川の河口の誕生

出典:「松ヶ崎堀割御普請絵図」(新潟市市史編さん室所蔵)、「新潟市史資料編3」(新潟市)所収



▲築造された松ヶ崎堀割 ▲決壊して本流化した河口



大小さまざまな潟が存在する
享保15(1730)年より前の
新潟平野の地形

砂丘など 山地・丘陵 河川・潟湖

大河と土砂と砂丘列が生み出した 水浸しの大地・新潟平野

太古の新潟平野は長く海底に沈んでいましたが、約3百万年前から、日本列島を取り囲む東と西のプレートから強い圧縮が日本列島に加わります。この東西圧縮によって日本列島が隆起し、急峻になった山地を信濃川と阿賀野川が侵食して大量の土砂を運び続けたことで、新潟平野の原型が形成されました。

その後、8千年前の縄文期には新潟平野の内陸部まで海が入り込みました。海岸線と並行して沿岸州や浜堤、砂丘が何列も形成され、その内側には巨大な潟が出現しました。さらに、1千年前頃には、阿賀野川を始めとする新潟平野の各河川の河口が、砂丘列に塞がれたことで日本海への排水が困難となり、大きな潟や湿地が広がる水浸しの大地が誕生しました。

河口が開削され、現在の阿賀野川に

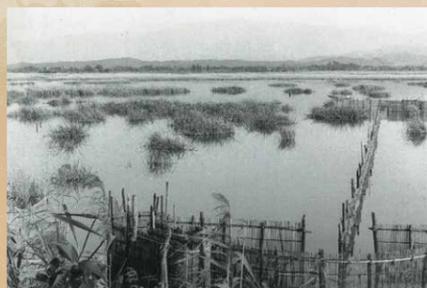
こうして、「水沼の蒲原」と呼ばれる水はけの悪い大地となった新潟平野では、河口を塞がれた各河川は砂丘列に並行して流れて、信濃川や阿賀野川などの大河に流れ込んでいました。阿賀野川も河口を塞がれ、現在の通船川周辺を流れて、信濃川と河口を共有していた時期がありました。

江戸の享保期になると、新発田藩内では紫雲寺潟の開拓工事が始まりました。工事に伴い河川が締め切られたことで、阿賀野川に流れ込む流量が増え、藩内の排水が困難になりました。そこで、新発田藩は享保15(1730)年に、松ヶ崎浜村地内の阿賀野川の屈曲部の砂丘に、余分な水量だけ日本海へ放流する「松ヶ崎堀割」を開削しました。しかし、翌年の雪解け水などの洪水で堀割は決壊して川幅が広がり、現在の阿賀野川の河口が形成されました。

この河口の誕生により、阿賀野川両岸に広がる平野では排水条件が大きく改善しました。一方で、旧河道の流量は減少し、後に現在の通船川となりました。



▲亀田の砂丘(出典:「亀田郷1978」(新潟県教育委員会))



▲干拓前の福島潟の様子(出典:「豊栄市史民俗編」(豊栄市))



▲昔の通船川の様子(出典:「亀田郷治水史」(亀田郷水害予防組合))